

〈IR3S プロジェクト〉

東洋大学 TIEPh・茨城大学 ICAS 共催国際セミナー

持続可能な発展と自然・人間

—西洋と東洋の対話から新しいエコ・フィロソフィを求めて—

自然の聖性と自己の問題

竹村牧男（東洋大学）

環境が深刻な危機に陥っていることは、さまざまな仕方で論じられている。問題群としては、「温暖化と異常気象」「海面上昇による国土の縮減」「オゾン層破壊による健康への影響」「生態系の変化と絶滅種の増大」「水や土壌の汚染 食物の安全性の低下」「人口の増大と食糧確保の課題」「シックハウス症候群等、化学物質の諸問題」等々がある。

こうしたことが問題となってきた背景には、自然を人間のための資源・素材と見て、それをどこまでも利用・加工・搾取してきたことによるのであろう。このことは、確かに人間の物質的な方面の豊かさを実現したが、逆に我々の住む環境の汚染・破壊をももたらし、深刻な問題をひきおこしてきた。この状況に対して、種々の分野での取組みが課題になっているが、哲学・思想の領域においては、自然観の再考、そして自己の本来のあり方の自覚と、そのことに基づく新たなライフスタイルの実践が課題であると考えられる。

かつてキリスト教では一般に、自然は人間の利用のために神によって創られたと考えられていたと思う。しかし近年、この考え方をくつがえそうとする新たな神学が唱えられてきている。間瀬啓允によれば、以下のようである。

たとえば、聖書の新たな解釈から、「人間は神のステューワード、神の信託者として、自然の全体におよぶ支配権をもつのだ。人間は現在と未来にわたる環境の全体に対し、不可譲の義務と関心をもたざるをえない立場にある」（イギリスの国教会の指導的な地位にある牧師、ヒュー・モンテフィオーレの説）と唱えられている。

また、ホワイトヘッドの影響を受けたプロセス神学においては、「自然と人間の相互依存性の確認・大いなる連鎖の認識・すべてを目的として扱う拡大された責任論理・神への献身はあらゆる生命体の尊重と、これを繁栄させる責任を含む・素粒子から岩石、動植物、そして人間にいたるまでの全生命の幸福を強調」といった思想が説かれている。

さらに、「エコシステムをもったこの世界は「神のなか」に存在している。……神は世界のプロセスのすべて「のなかで、とともに、のもとで」現存している。それゆえ、神の存在と創造活動の側面から、世界のプロセスに対しては尊敬と畏敬の念が求められ、また価値づけがおこなわれるのだ」（イギリスの指導的な国教会の牧師・分子生物学者のアーサー・ピーコック『神の創造と科学の世界』）と、神を内在的に見て、この世界を神聖視する立場も現われている。

こうした神学の傾向に対し、間瀬啓允は、「純粋な宗教的回心の目覚めの基礎には、創造の秘儀への畏敬と尊敬の念がある。世界をつくったのはこの〈私〉ではない。……こうした〈恩寵、恵みのセンス〉によって環境世界に対する〈私〉のかかわりの〈転心〉＝意識の変革がでてくるのだ。……回心した者の自然に向かう態度はエコロジカルである」（間瀬啓允『エコロジーと宗教』、岩波書店、1979年）と解説している。

一方、仏教は自然をどのように見てきただろうか。上述の新たな神学の考え方の中、特に「神を内在的に見て、この世界を神聖視する立場」と照応する仏教の自然観を見てみよう。

たとえば、天台宗では、「草木国土、悉皆成仏」の句が生み出された。この句は、お能にもしばしばとり入れられ、一般民衆の自然観ともなっていたと考えられる。あらゆる草木や土・砂・石・岩までもが成仏するということは、仏性ともいべきものが、自然世界をも貫いて存在していることを物語るであろう。

また、真言宗では、空海の『卍字義』に、「常遍の本仏は、損せず虧せず。汗字の実義は、汝等まさに知るべし。水外に波なし、心内すなわち境なり。草木に仏なくんば、波にすなわち湿なけん。かれにあつてこれになくば、権にあらずして誰ぞ。……しかりといえども本仏は、損なく減なし。三諦円渉にして、十世無礙なり。三種世間は、みなこれ仏体なり。四種曼荼は、すなわちこれ真仏なり。汗字の実義、まさにかくのごとく学すべし」と説かれている。やはり草木に仏がいると述べている。真言密教においては、自然もまた仏なのである。

曹洞宗の道元は、山水が『法華経』にほかならない、山水が説法しているといっている。たとえば、「峯の色溪の響もみななから我釈迦牟尼の声と姿と」と歌っている。『正法眼藏』には、「溪声山色」、「山水経」、さらには「無情説法」といった巻があり、道元が自然に聖性を見ていたことはうたがない。

以上は、日本仏教の教説の中のほんの一部の例であろうが、自然はすなわち仏というべき存在であると見ていることが示されている。いったい、自然はどうして仏といえるのであろうか。自然が仏であるあり方は、どこで自覚されるのであろうか。

たとえば、道元は、「山水経」に、「而今の山水は古仏の道現成なり、……空劫以前の消息なるがゆへに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆへに現成の透脱なり」と説いているように、山水はいわば主客未分以前の自己にも他ならないとされる。その主客未分の当所において、自然は自己でありかつ仏なのである。道元は、「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけり」と歌うが、この歌の詞書には、「本来の面目」とある。自然を対象的に捉え、自己をも同じく対象的に捉えて、その対象に執着しているあり方から解放され、むしろ主体そのものとしての自己に住するとき、主客未分的なあり方において、真実の自己が実現する。このとき、自然もその本来のあり方に帰る。そこが仏といわれているわけである。

天台宗の「草木国土・悉皆成仏」の句の背景には、忠尋の『漢光類聚』によれば、七つの思想があると考えられるという。すなわち、「草木成仏に七重の不同有り。一、諸仏の観見、二、法性の理を具す、三、依正不二、四、当体の自性、五、本より三身を具す、六、法性の不思議、七、中道を具す」である。この中、「具法性理」では、身心と環境とを、空性にしてしかも智慧でもあるような本性が通貫していて、両者は本来、一体であり、そこにおいて草木等も成仏するという。「依正不二」では、身心の個体と環境とは切り離せない存在であり、それゆえに草木等も成仏するという。「具中道」では、一念三千の道理から、心具三千のみでなく色具三千が言え、身心と環境は相互に浸透しあっていて、そこにおい

て草木等も成仏するという。以上に見られるように、天台の教義においても、単に自己の外の自然が仏であるというのではなく、自己と相関的もしくは不二ないし一体であるような自然において成仏が言っているのであり、逆に言えば、自己もまた、通常の自我意識において理解されているような自己を超えた自己が本来の自己であることが語られている。

空海の前に引用した句の中には、「三種世間はみなこれ仏体なり」とあった。ここに出る三種世間とは、智正覚世間・国土世間・衆生世間であり、すなわち、かけがえのない主体としての仏と、その仏が住まう国土と、その国土に生きる衆生のことであるが、そのすべてが仏体だという。逆に言えば、本来の自己とは、単なる身心としての個我のみなではなく、自己とその置かれる環境とそこに住まう人々のすべてであるということになる。そういう自己の全体において、自己も仏であり国土も仏であるというのである。

この仏という存在に関して、『即身成仏義』の「即身成仏偈」で、「六大無礙にして常に瑜伽なり、四種曼荼各々離れず、三密加持すれば速疾に顕わる、重重帝網なるを即身と名づく、……」と示されている。この初めに出された六大とは、ふつうは地大・水大・火大・風大・空大・識大の物質的・精神的諸元素のことであるが、空海はこれを『大日経』の「我れ本不生を覚り、語言の道を出過し、諸過解脱することを得、因縁を遠離せり、空は虚空に等しと知る」および『金剛頂経』の同様の句によって解釈する。すなわち、識大＝我覚、地大＝本不生、水大＝出過語言道、火大＝諸過得解脱、風大＝遠離於因縁、空大＝知空等虚空と見る。これは仏の体が、因縁を離れ、もとより不生で空でありかつ覚の智慧であることを物語るものである。

しかも「かくのごときの六大法界体性所成の身は、無障無礙にして互相に渉入相応し、常住不変にして同じく実際に住せり。故に頗に「六大無礙にして常に瑜伽なり」という。無礙とは渉入自在の義なり。常とは不動、不壊の義なり。瑜伽とは翻じて相応という。相応渉入はすなわちこれ即の義なり」と説いている。つまり、三種世間としての世界即個としての自己が、しかも他の無数の世界即個の自己とたがいに無礙に渉入しあっているというのである。ここに、「重重帝網なるを即身と名づく」という句も生れるのであろう。

以上、自然の聖性を見る思想が、日本仏教には豊かにあること、それはしかし、世界と切り離されて個我があるという理解を超え、主観・客観の二元的枠組みを超えて、自己の本来的なあり方が開かれた際にこそ見出されるべきものであることを見た。その宗教的な悟道の体験においてこそ、自然は成仏するとも仏であるとも言われたのである。

覚者（仏）の証言に描かれたこのような自己と自然の理解が我々に与えられることによって、自己と自然の関係ないしその存在意義を教えられるとき、あらためてその両者に対し畏敬の念を生じるであろう。このことは、従来近代を主導してきた、自我への執着と対象の分割・操作をよきこととして疑わない思想的立場に、根本的な反省をもたらし、個人レベルでのライフスタイルの転換をもおのずから導くことになり、また社会制度等の変革を展望する一つの視点をもたらすことになろう。

では、自然が本来、仏であるとして、その自然は自己の聖性を自ら実現していくものなのであろうか。たとえば鈴木大拙は、『日本的靈性』において、「大地性」という言葉を用い、自然の自己浄化作用等を礼讃した。それは、大地が、母のようにすべてを載せ、汚い

ものすらも受け入れて、しかも浄化し、生命を育むことによる。天象よりも大地、父なる神よりも母なる仏に、我々の無条件の救いを見ることが出来る。大拙にとっては、その大地の愛こそが、我々のいのちの根底にあるものであり、心の基底にあるものであり、靈性そのものなのである。

しかし、自然は自己組織化する平衡系であって、自然に任せておけばすべてうまく行くという事態は、今や失われてしまった。したがって、我々は本来の自然の聖性の自己実現に手を貸すべく、人間の叡智と努力によって、自然の保護に力を尽くさなければならない。もはや「自己浄化する自然」に甘えることはできない状況も、よく自覚すべきであろう。その意味では、ある地域に、手つかずの自然を保全（preservation）することも重要であろうが、人間が関与してより適切に自然環境を保護（conservation）していくことが、重要である。

かつて道元は、人間が本来、仏であるなら、なぜあらためて修行しなければならないのかを問い、結局、むしろ本来、仏であるからこそ、その仏であることを発揮すべく修行がなされざるをえないとの肯づきに至った。もし環境が本来、仏であり、あるいは仏国土であるはずのものであるなら、その浄土であることを発揮させていくべく、環境浄化への行動がおのずからなされることになろう。もとより自然は自己の一部なのであり、その意味でもその病を治癒すべく、自ら関与していかざるをえない。キリスト教に、自然を保護・管理すべき stewardship の問題が説かれているように、仏教においても、菩薩（大乘仏教徒）であるなら、この地球における本来の聖性の発揮（浄土の建立）に向けて努力していくべきことが要請されていることも、合わせて再認識すべきであろう。

なお、自然観の再考と人間観の転換とは、単に教説に学ぶだけで真に可能かどうかは問題がある。やはりそのようなライフスタイルの転換に実効性をもたすには、実際に自然の聖性に深くふれることが必要なのではなからうか。前の「大地性」に関連して、大拙は次のようにも言っている。「宗教は実に此具体的なものからでないとは発生しない。靈性の奥の院は実に大地の座に在る。平安人は自然の美しさと哀れさを感じたが、大地に対しての努力・親しみ・安心を知らなかった。随つて大地の限りなき愛、その包容性、何事も許して呉れる母性に触れ得なかつた。天日は死した屍を腐らす。醜きもの穢らはしいものにする。が、大地はそんなものを悉く受け入れて何等の不平も云はぬ。却てそれらを奇麗なものにして新しき生命の息を吹きかへらしめる。平安人は美しき女を愛して抱きしめたが、死んだ子をも抱きとる慈母を忘れた。彼等の文化のどこにも宗教の見えないのは固より然るべき次第である。」（『日本的靈性』）

今日、特に都市に住む現代人は、かつての平安人同様、この「大地性」を忘れかけてはいはしないであろうか。自然の本質、そして自己の本来の姿を取り戻し、自然と自己の聖性、大地の靈性を自覚するためにも、やはり生活のどこかで自然にふれ、自然に浴することを忘れてはならないであろう。このとき、特に現代の都市に住む人々に、「大地性」をどのように取り戻していけるのかが問題である。その取り戻し（環境デザイン）の実践の中に、抽象的でない、具体的な「エコ・フィロソフィ」が自覚されてくることであろう。